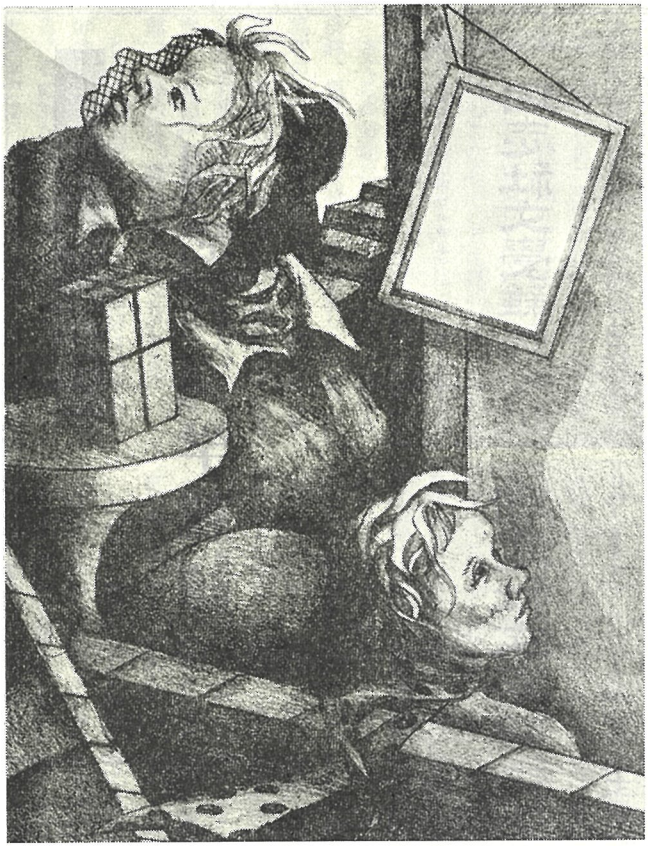

えと文

羽倉詠子

この箱を持って

「この箱を持って」これは私の石版画によく出てくる題であるが、特にリボンを掛けた四角な箱に意味を持たせたいのではない。目にふれた人に、中味を何と想像してもらっても、それはそれで本当に有難いことである。「何が入っているのですか」「空っぽですか」「いや、ケーキかも」などと、たずねられて、「さあー、お好きなように……」と、その人の顔を申し訳なさそうに見る私である。強いて言えば、未知の世界――わからないものへの興味を、お互いに楽しみたいだけかもしれない。大きな箱の地球の中に、あるいは小さな一部屋の箱の中にいる私たち、その箱の中にいることをとにかく受け入れつつまた一方飛び出したい欲望にかられながら……。いずれにしても、せめてその時その時の気分で箱の中味をつめかえてみては、と思っている。

（女子中・高教諭・美術）